
The Zdan**特別編** 下北半島サル調査

山大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Zdan 特別編 下北半島サル調査

【Nコード】

N4165BA

【作者名】

山大

【あらすじ】

山大の活動報告『The Zdan』シリーズ出張編！！ 下北半島にニホンザルの調査に参加してきました。中身はただの雑談集です。

二十三日(1日目)

ピロピロ……。

ガチャツ。

「……………」

スピー。

「いや、寝るなよ山大」

「んが？」

「お前、今日から下北行くんだろ？ 何目覚まし切って二度寝しようとしてるんだ」

「ぬう……………」

平成二十三年度十二月二十三日。

午前七時三十分。

山大、起床。

* * *

下北にニホンザルの調査に行くことが決定したのは、まだ十一月の下旬だった。

詳しいことは省くが、簡単に言うとこんなやり取りがあった。

「毎年、私たちツキノワグマ研究会では、ツキノワグマの食外被害対策の一環として市近郊の里山で踏査をしています」

「いやS藤さん。今更どうしました？」

「I原くん、話の腰を折らない」

「……すみません」

「ですがクマ研の活動はそれだけではありません」

「そう言えば山大は色んな調査に行ってるよな。メダカとかカラスとかコウモリとかノウサギとか」

「こき使われているとも言っけどね……」

実際、調査に参加するたびに僕はとんでもない目に遭ってるし。

「今回もその一環です。下北の北限のニホンザルの調査です」

「へえ、下北」

「はい。詳しい日程はこちらです。十二月の二十三日から三十日までの一週間、下北半島に行ってサルを追いかけてきて下さい」

「……………」

クリスマスもろ被りじゃん。

「強制じゃありませんし、途中参加も途中退場も歓迎だそうです。行ってみたい人はいませんか？」

「あの、俺は二十三から実家帰ります」

「おれも」

「右に同じく私もです」

「あ、そうなんですか」

「オレは行ってみたいですけど、部活の方の合宿があるのでラスト三日の途中参加なら」

「わかりました。I島くんは途中参加、と……」

皆結構忙しいんだな……。

僕は特に用事ないけど、たまにはゆっくりとしたクリスマスを過ごすのも悪くないな。

「山大はどうする?」

「どうしようかな」

「あ、山大くんは全日強制参加だそうです」

……………。

「……………はい?」

「研究室のS木先輩の伝言です。『サル追いかけるついでにカモシカのフンとか拾ってくるから手伝え』だそうです」

「……………」

横暴だあああああああつ!!

* * *

以上回想終了。

寮の同室の先輩に起され、僕は必要最低限の道具を詰め込んだがツクとエナメルを抱えて集合場所に歩いていった。

「……………」

誰もいねえし。

時計を見ると、集合時間五分前。

「……何で誰もいないの？」

まさか盛大なドッキリ？

寮で似たようなことは経験済みだから、無意識のうちに構える。その時。

ブブブ……。

「あ、メール。…… A先輩からだ」

『レポートがあと少しで終わるんで、それ終わってから出発します。とりあえず研究室に来て待つてて』

へえ、レポートがあるんだ。

じゃあとりあえず研究室に……。

「ちよい待て」

今現在の時刻は八時二十五分。

このタイミングで「もう少しでレポート終わる」？

「……まさか徹夜じゃないだろうなあ」

そしてA先輩が僕を下北まで車で送ってくれる手はずのはずだった。

「徹夜じゃないよー」

「あ、そうなんですか」

研究室に赴き、A先輩が淹れてくれたコーヒーを頂く。
そこには僕の他にS木先輩の車で、行くことになっていたT塚先輩も来ていた。

「確かに顔色は悪いわけじゃないようですが」

「うん。ちゃんと三時から五時まで仮眠はとったからね」

「「ぶふっ!?!」」

コーヒーが綺麗なアーチを描いた。

「三時から五時までって、三時間しか寝てないじゃないですか!」

「大丈夫だよ。慣れてるし」

「そういう問題じゃなくってですねえ」

「えー。でもこのレポート、二十六日までが締め切りだから、どうしても今日までに出さないといけないんだよねー。俺、全日参加だから」

「「……………」」

そう言われちゃ、無下に責めることも出来ない。

「山大くん、助手席に座って話しかけ続けるんだよ?」

「了解っス…………!」

T塚先輩がマジで心配そうな顔をしていた。
死にたくねえし。

* * *

ここで念のため、下北に行くメンバーを簡単に紹介しておこうと思う。

まずはA先輩。

この人は下北半島の風間浦でサル調査をすることになっている。

そして途中まで僕を車で乗せて行ってくれる人だ。

風間浦に着いたら僕はS木先輩の車に乗り換える手はずになっている。

次にT塚先輩。

この人は大間でサル調査。

S木先輩の車で大間まで行き、途中下車の予定。

S木先輩とU坂先輩。

この二人が僕と一緒に佐井でサル調査に参加する人たちだ。

強面のS先輩と異様なほど陽気なU坂先輩。

この二人、足して二で割ればちょうどいいと思う。

そして僕とT島の後輩コンビ。

僕は全日フル参加だが、T島はラスト三日だけの参加。

ちなみにT島も佐井。

さて一日目。

しかも移動途中。

いきなりU坂先輩がやらかしてくれる。

* * *

「ん……？」

青森県に入るまでは特に何も起こらなかった。
が、高速道路を下りてしばらくした後、U坂先輩が運転するS木
先輩の車が不審な動きを見せる。

「あいつら、何でこんなところで曲がるんだろう……？」

「こつちじゃないんですか？」

「違うよ。このまま直進のはずだ」

A先輩は不審そうに、U先輩たちの後を追う。

近道でもあるのだろうかと周囲を見渡すが、どんどん人気がなく
なっていく上に路面状況も悪くなっていく。

こんなところに何の用があるのだろうか？

……などと考えた矢先。

「……………」

目の前に広がる雪原。

その周りを柵で囲っているところを見るに、どうやら牧場らしい。
そして道の脇には「シャージー牛」やら「ジェラート」の文字の
躍る旗が並ぶ。

「いやー、T塚ちゃんがる ぶ読んでたら、ここの牧場のジェラー
トが美味しいって見つけてさ！ そしたらS木がタイミングよくそ
この旗を発見してね！ こいつあ行かなきゃダメっしょっ！ って
ことになったんだよ！ あははっ！」

「……………」

後のA先輩の独り言。

「あいつのあの奔放さがたまにイラッと来る」

まあでも、ジエラートが本当に美味しくてすぐ機嫌は直ったけどね。

* * *

さらに道中。

「げ

「……………」

フロントガラスの外の風景が消える。

真っ白にな……………。

「ホワイトアウトおおおおおおおおっ！！」

やべえ。

前を走るS木先輩の車のライトも見えん。

視野五メートルもないよ？

車なのに時速三十キロ以上出せないよ？

A先輩とギヤアギヤア騒ぎつつ安全運転で一路下北へと。

この時点で午後四時を回っていた。

そして風間浦でA先輩とは別行動。

僕はS木先輩の車に乗り換える。

そんでさらに一時間後。

大間でT塚先輩と別れる。

この時、大間班の拠点となる公民館には学生が一人しかいなかった。

「どうしたんだろう？ うちらが一番だなんて」

「だな。いつもならH大とかO大の奴らが来て飯の準備してるのに」

車中で首を傾げるU坂先輩とS木先輩。

「天気が悪くてフェリーが出てないのかな……」

そんなU坂先輩の心配は的中する。

この日、海は大いに荒れ、中型以下のフェリーは出航を見合わせていたのだ。

つまり……。

「……誰もいねー……！……」

佐井班の拠点であるところの元保育所には誰もいなかった。

いや、正確にはストーブをつけて待っててくれていたご近所の方がいたのだけれど、まあノーカウント。

「どうします？ もう六時過ぎですよ？」

「いつもなら他の大学生たちがご飯作って待っててくれるのにな」

「いつ来るかもわかんねえから、俺らで飯作るわけにもいかないからな。やることねー」

「S木。トランプある？」

「ある」

「ポーカーですか大富豪ですかババ抜きですか七並べですかダウトですか神経衰弱ですか？」

「全部やるー」

……マジで全部やっても誰も来ませんでした。

「……………(ぐう)」

「……………(ぐう)」

「……………(ぐう)」

空腹です。

夜八時です。

お昼に皆で食べたラーメンが最後の食事です。

「……………佐井の夕飯のルールは『勝手に作って喰え』だったよな」

「お待ちなさいS木。それは二日目以降のルールだよ。一日目はH

大が大間から運んできてくれるカレーだって決まってるじゃない」

「さつき大間に寄った時に受け取ってくればよかつたんだっ！！」

「うちらだけで食べたら後で何言われるか分からないじゃない！」

先輩二人が騒ぐ中、僕は空腹に耐えながらじつと外を見ていた。

そして待ちに待った瞬間。

ガラッ。

「……………っ！！」

大急ぎで玄関に向かうと、後ろに学生を従え手に寸胴鍋を持つ男の姿が。

「「T中さん!!」」

「おー、U坂にS木ー。久しぶりー。ようやく到着したよ」

寸胴鍋からは美味そうなカレーの匂いが漂っていた。

* * *

これが下北サル調査の一日目の出来事である。

まあサル調査と言っても一日目は移動だけで、本格的な調査は二日目以降なんだけど。

僕は明日の調査に備え、夕飯後、大人たちの晩酌に少しだけ付き合っただけで床に着いた。

……床と言っても、煎餅布団みたいなペライ布団に寝袋を追加したものだ。

しかも寝室のストーブは壊れててつかないし。

これについては事前に聞かされていたので、僕は寒さ対策を施してから寝袋に潜り込んだ。

適量のアルコールも手伝い、僕はすぐにウトウトと眠りにつく。

だが日付が変わって二時間後。

僕は思いがけない理由で目を覚ますこととなる。

二十四日(2日目)

夢うつつの中、ガヤガヤとした物音に気付いた。

「
「
「
」
」
」

おそらくは人の声。

どうやら遅れていたO大のメンバーが到着したようだ。

「う……………」

でも眠い。

仕方ないから、挨拶は起きてからにしようか。

などと考えていたら、一際大きな声が聞こえてきた。

「自己紹介!!」

『『ハイ! ハイ! ハイ! ハイ! ハイ!』』

「…………ふはあつ! えー、H大クマ研、佐井は五年目になりました、
T田です! 一週間よろしくお願いします!!」

『『『おー!!』』』

「……………」

自己紹介前にイッキしてなかったか?

ノリがまるで寮生だ……！
危ない危ない。

起きてたら僕もやらされるところだった……。
まあでもビールならできるか。
日本酒なら少しキツイけど。

ふと気になって目を開ける。

「はい次！」

「うっす！」

「……………」

コップに注がれる、『大男』の名を冠する焼酎。

『『ハイ！ ハイ！ ハイ！』』』

「くっっ！！ G大クマ研、佐井は三年目のS木！ 四日目です
退場だが、よろしく！」

『『『おーっ！』』』』

「……………」

見なかったことにしよう。

僕は寝袋に潜り込み、今見た光景を忘れるべく瞳を閉じた。
が。

「うおっっし、次は俺だあ〜」

「T中さん、もう止めとけ。大分来てんだろ」

「んなに〜？ 俺には吞ませねえってかあ〜？」

「そうは言っていないけど、アンタ酔うとすぐ喚き散らすから迷惑な

「んだよ」

「んだとおく？」

「M上いゝ、お前年下の癖に生意気なんだよおく！」

「アンタは教授になったからって調子に乗りすぎなんだよ！」

「こおんのおくっ！」

「つと……危ねえな！（ガスッ）」

「何しやがるんだあっ！！！」

「正当防衛だ（ガスガスッ）」

「お前暴力団かあ！」

「うるさい。とつとと大人しく寝ろ（ガスガスガスッ）」

「……………」

大の大人がいきなり取っ組み合いを始めましたよ！？

いや、正確にはT中さんが一方的に蹴られてるだけだけど。

つーか引くわっ！！

大人のマジ喧嘩って見苦しい……………！

そんな中、聞こえてくる先輩たちの声。

「あーあ、またかよ」

「今年も何だかんだでこの展開かー」

また！？

今年も！？

何この二人毎年こんなことしてんの！？

色んな意味で目眩を覚えた僕は早々に寝袋の中に戻った。
本当に、今見たことは忘れよう……………。

* * *

朝起きるとT中さんの口元に紫色の傷跡ができていた。

「……………」

忘れようと思ったのに……！

「えー、改めまして、佐井班の班長を務めますH浦だ。よろしく」

軽く頭を下げる白髪交じりのおっちゃん。

つか、T中さんの件についてはスルーなんだ。

やっぱり毎年やっているらしく、僕ら一年目メンバー以外は慣れている様子。

「じゃ、一年目集まれー」

「……………はい……………」

一年目メンバーは僕を含めて四人。

二人はH大、もう一人はO大から来たそうだ。

「G大の山大です。出身はここ青森です」

「……………オメ、青森県民か」

H浦さん、謎の食いつき。

「え、あ、はい。そうですけど」

「なしてオメ青森県民の癖して青森の言葉使んねんだ」

「そう言われましても……」

「青森県民が青森さ帰って来たんだば青森の言葉使えや」

「……はい」

青森出身と分かった途端訛り全開のH浦さんだった（本当はもつと方言がきついんですが、文字にすることが不可能でした）。

「O大のY山です。雪山は初めてですけど、頑張ります！」

聞けばO大周辺の積雪量に度肝を抜かれたらしい。

よくそんなんでこの調査に参加したな……。

「H大のN務です。俺は大阪出身です」

へー。

言われてみれば関西圏の訛りが若干出てる。

「同じくH大のM崎ちゃんです！好きなものは大腸菌とバクテリアオファージです！気軽にファージさんと呼んでくださーい！」
「……………」

ちょっと待て何かとんでもねえのが出てきたぞ。

「気にしないほうがいいぞ山大。こいつはこんな奴だ」

「気にするなって言う方が無理な相談じゃないかコイツは!?!」

大阪人よりキャラ濃いぞこの女！

何故に大腸菌!?!

そしてどうしてファージさん!?!

「じゃあとりあえず、さすがに四人いつぺんに連れて行くのは無理があるから」

H 浦さんまさかのスル！。

「Y山」

「は、はい」

「お前はT田と行って雪山に慣れる。青森県民の山大とH大クマ研の踏査で慣れてるお前らは私と来い。サル調査の基本を教えてやる」
「「「「了解です」」」」

サル調査、本格的に始動。

* * *

「お、あつたあつた」

僕ら三人を車に乗せ、H浦さんは拠点近くの林道を走っていた。そして何かを見つけたらしく、路肩に車を駐車する。

「ほら、降りろ。足跡だ」

「サルのですか？」

「おう。数え方を教える」

車から降りると、確かに辺り一帯に小さな足跡が散らばっていた。

「これがサルの足跡だ。この辺りの他の生き物とは全く形が違うから間違うことはないとして、問題は大きさだ」

「大きさ？」

「このように複数の足跡があるということは、こいつらは群れで移動したというわけだが、群れの構成は目視よりもこの足跡の数で行った方が効率的だ。一列に並んで歩いてるわけじゃないしな」

「なるほど」

「それで構成についてだが、基本はアダルトオス、アダルトメス、ヤングアダルトオス、ヤングアダルトメス、チャイルド、ベイビーで区別している。ただしこれらを足跡から判別するのは非常に困難だ。だから細かいことは別にこだわらなくていい。単純に足跡を大、中、小で区別しながらカウントしていけばいい」

「大中小の区別は？」

「基本は個人の感覚で行なう。だいたい後ろ足の親指の付け根から外側までの長さが五センチ以上なら大、四センチ前後なら中、三センチ以下なら小とすれば問題ない」

確かにこうして見てみると結構大きさに違いがある。

「……………」

「どうしたN務」

「あの、この微妙に重なってゴチャゴチャしてるのはどうすればいいんすか？」

「ああ、それは足跡を追いかけることができる場所なら辿って、バラバラになったところで改めてカウントしろ。無理なら何となくでいいぞ」

何となくでいいんだ……。

「あと、たまに群れから少し離れて移動する奴もいるから、足跡が集中しているところから前後五十メートルは確認するように」

「了解しました」

「よし、じゃあ行け」

「……」

「どうした。早く足跡数えて来い」

「あの……H浦さんは行かないんですか？」

「私は車で休んでる！ 年寄りに雪道歩かせるな」

「……」

一瞬だけS木先輩の顔が浮かんだのは気のせいだろうか？

* * *

カウント中は特に何もなかったので報告だけ。

大 9

中 7

小 5

列になっけていて区別不能3+

計24+ 頭の群れでした。

報告したところで、ふいにH浦さんがニヤリと笑った。

「お前ら、サル見たいか？」

「え？」

「そりゃまあ、見たいですけど」

「見れるんですか！？」

「おう。この足跡はまだ新しいからな。そう遠くまでは行ってない
だろっ」

「……おー」

「この足跡の先には浅い川があるんだが、連中はそこを渡ると予測される。先回りして待ち構えていれば向こうからきつと来る！」

「……おーっ！」

「よし、車に乗れ！ 先回りだ！」

「……はいっ……！」

車に乗り、少し先にある橋を渡る。

そこから対岸の林道を走り、路肩に停める。

H 浦さんの予想だと、この辺りに来るらしい。

「いいか、耳を澄ませ。姿はなくても鳴き声はするかもしれない」

「はいっ……！」

五分後。

「ニホンザルは地上性だが、たまには木にも登る。その時の枝の動きは風のそれとはかなり違うから間違うなよ」

「はい！」

十分後。

「サルはクマと違って歩き方がガサツなんだ。クマが枝を折らずヤブを鳴らさず歩くのにないし、サルは歩く時は盛大な音がする」

「……はい」

十五分後。

「……」

「……」

「……来ないな」

姿どころか泣き声も揺れる枝も足音もありませんが？

「もう行ったあとなんじゃないんですか？」

「だったら足跡があるだろう。少し戻ってみようか」

「……はい」

車に乗り込み、元来た道を逆送する。

そしてすぐにそれを見つける。

「……………」

「……………」

橋の上に積もった雪にしっかりとついた、真新しいサルの足跡。
もちろん、さっき橋を渡った時にはなかった。

「……………これをサルに撒かれるという」

「……………」

川が冷たいからって、野生動物の癖に人間の橋を使うなよ！

便利なのは分かるけど！

* * *

その後。

H浦さんの「よし行け」の号令の元、山一つと沢一つ登っている
時のこと（もちろんH浦さんはいない）。

「…………ん？」

「どうしたファージ」

「何か聞こえなかった？」

「何かって何だよ」

「何かこう、キイ、って感じの音」

「んー？」

耳を済ませてみる。
すると。

キイ、キイ……

「あ、ホントだ」

「結構近いぞ」

「何の音だろ？」

「トリじゃないしね」

三人で頭を捻る。

その時N務が不意に口にした。

「サルっぽくね？」

「……………！」

顔を見合わせ、音のする方を見る。

だがそこには反り立つ尾根があるばかり。

今いる場所は沢の近く。

ここからだと言源は上手く見えない。

「……………登ってみるか？」

「この尾根を？」
「崖みたいだぞ」
「ウチらじゃキツくない？」
「けどさ サル見たくないか？」
「……見たい」

崖登り決定。

雪が積もっている状況での崖登りは、意外と楽であることはあまり知られていない。

夏場などの土が露出している所だと地面の凹凸ぐらいいしか足場がないが、冬場の積雪量の多いところならば足場を無理やり作ることができるのだ。

つまり、爪先を雪に突き刺すようにすればいい。

「お。お。お」

「どー？ 山大」

「結構行けるぞ！」

爪先と、ついでに手も雪に突き刺しながら崖を昇っていく。

途中雪が崩れやすいところはヒバの木の枝をロープ代わりに使う。生きている針葉樹は細い枝でも結構丈夫。

人一人バランス取る分には申し分ない強度がある。

「N務。頂上はまだ先か？」

「いやー、もう少しー」

「ファージ呼ぶか？」

「いや、上行って空振りだったらアレだから、まだいい」

一応女子であるファージは下で待機。

サル本体なり足跡なりを見つけてから登っても大丈夫だろうという判断。

「……よつと」

「はー、よつやく登りきった……」

下を見ると、結構登ってきたのが分かる。
十五メートルくらいか？

「さて……」

「サルはいるかな……？」

辺りを見渡す。
が。

「……」

何もいない。

と言つか、生き物の気配もしない。
当然のように足跡もない。
その癖、

キイ、キイ……

例の不思議な音は近くから聞こえてくる。
そう、少し離れた所に立つ枯れた木から……。

「……おい」

「……ああ、まさか」

「……」

「おい、二人ともー、どーだったー!?」

下からファージの暢気な声が聞こえてくる。

「……枯木が風で軋んでる音だったーっ!」

「マジかー!!」

「マジだー!!」

「気をつけて降りといでー!!」

「テムエ必死こいて崖登った奴に対してそれだけかよーっ!?!」

「じゃあ降りてきたらハグしてあげるー!!」

「いらんわっ!」

この日、結局一度もサルの姿を見ることはできなかった。

あ、ハグは全力で拒否しました。

少し失礼かなと思ったが、ファージ本人がケラケラ笑ってたため罪悪感は消し飛んだ。

* * *

二日に一度の入浴（大間まで移動しての温泉）を済ませ、夕食の支度にとりかかる。

S木先輩曰く、佐井の夕食のルールは「勝手に作って喰え」
その由来が明らかとなった。

「……………」

今日の分の調査報告書はファージが書いてくれるらしいので、手持ち無沙汰となった僕は厨房（元給食室）に顔を出した。
するとそこには。

「おー美味そう！」

「味付けは塩コショウでいいかな？」

「いいって！ さ、食おうぜ！」

缶ビール片手に、カリッと焼いた厚切りベーコンを摘むS木先輩とH大のOさんの姿。

「何してんですか……？」

「おー山大。お前も食べ食べ」

「あ、ありがとうございます……じゃなくて！」

何夕食前に勝手にツマミ作って呑み食いしてんだこの人たち！？

「山大よ……これが佐井のルールだ」

「つまり、飯を作った者は何を食べてもいいんだよ……！」

「夕食を作るう、でもただ作るのじゃ割に合わん」

「じゃあ呑もう、それにはツマミが欲しい」

「それなら先にツマミを作ろう！」

「……………」

とんでもないルールですねそれ！？

「まあ逆にここで呑みたきや全員分の飯を作れってことでもあるんだがな」

「山大君ちようどいいところに来たね。手伝ってよ。美味しいツマミを作ってあげるから」

「はあ……」

何かもう、どうでもよくなってきた……。
僕はそれから一時間近く、ひたすら野菜を切り続けたのだった。

十二月二十四日。

下北サル調査二日目のことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4165ba/>

The Zdan特別編 下北半島サル調査

2012年1月15日01時48分発行